



## 研究

### 宗祖本佛論に對する瞥見

望月海伯

#### (一)

古來、勝劣の一派宗祖本佛論を立つと聞く、然るに偶々頃日綱要刪略七所引興門學匠某の説を見及び、所立の主旨を聞くに及び、聊か瞥見を述べ諸賢の高評を乞はんとす。

略して刪略所引の文を舉げん。『因に或説に云く當今下種の時至れり、宜しく本因口唱の用法を用ひて、以て本尊を定む可し。法は謂く南無妙法蓮華經、人は謂く大聖人也乃至本尊抄に云く意の曰く、此時地涌千界出現<sup>シテ</sup>本門釋尊<sup>ヲ</sup>爲<sup>ニ</sup>脇士<sup>ト</sup>云々又云く色相莊嚴の本尊(一品二牛能説ノ教主)は即ち在世脫益の形像にして都て末法には用無しと』已上

予一讀慨然たらざるを得ず、之れ彼の一派其の珍とする本因妙抄及び百六ヶ相傳等を根據とし、傍ら一五ノ八十御佛の本意は、法華經也。日蓮かたまりしいは、南無妙法蓮華經に過ぎたるはなし、及び本尊抄前引の文十八ノ六九釋迦如來の御神我身に入り替はらせ給ふ、等の文其外御義下初全上三等を以て其の説を潤色せんとするもの、如し。然るに其の最大珍とし、根據とする本因妙抄及び、百六ヶ相傳等は、恐らく後人の虚構にして、未だ廣く一般の認めざる所也。故に雪謗四ノ五十之れを破して云く『予カ法友住ニ持ス中山ニ故ニ親シク尋ニ討之ヲ及檢ニ<sup>スル</sup>中山寶藏ノ目錄ヲ曾テ無シ此錄外ノ書一乃至予偶獲ニ彼本因妙抄及百六ヶ等ノ抄、而電<sup>スル</sup>ニ<sup>ル</sup>不<sup>ル</sup>足ニ勝<sup>ニ</sup>論<sup>スル</sup>ニ謀計僞作也云々』と以て、眞僞奈邊に存するかを知るに足らん。更に刪略七ノ三十已下之れを痛論せるあり、其の僞作なる事瞭然たるべし、然らば彼の一派に於ける本佛論の思想は何れの時代にあるかを探らんに、彼の大石寺廿六代日寛上人(享保年間ノ人我<sup>カ透時ト同時代</sup>)已前の古著書等に於ては全く

此の事を見ず、寛師著の六卷抄に始めて此の思想の胚胎せるを見る、同時に六卷抄を以て宗祖本佛論の起源典記と稱するも亦過言あらざるべし。

而して彼徒の所謂末法相應の人法本尊とは何ぞ謂く人に約しては、宗祖法に約しては題目也。其の宗祖を本尊とする所以のものは、蓋し其の一期に三義あり曰く凡夫日蓮、再誕日蓮、久遠本佛也。

今彼れは、第三久遠本佛の宗祖、即ち佐渡赦免より弘安示寂に至る實体にして、之れ正しく本地難思境智冥合久遠元初自愛用心本有無作三身如來也』故に、今末法下種の正師宗祖を以て本尊とすと（本尊法鉢論六三）

若し法に約すれば、下種の正法本因口唱の五字を以てす、而して末法下種の正師正法は、宗祖既に、之れを定め給ふ。其の人本尊は、中老法公作延山棲神閣奉安の尊鉢にして、法本尊とは、彼家所藏の所謂楠板本尊是なり。此の人法本尊は同一木にして、人法不二を表し、共に末代の信境を示し給へる者楠板本尊の肩書『彌四郎國重』は正に

閻浮同皈末代皈敬の本尊なるを表示すと云ふが如きに至ては、余が淺學尙は牽強付會の見なき能はず、諸賢は已に棲神第四號卷頭Y S N 放授の『石山寛師の本尊義及び本尊法鉢論』に於て、之れを知られしからん從て是れに對する、批判は予の聞かんとする所なり。

更に彼徒『色相莊嚴佛、在世脫益末法無用』の思想は、寛師の六卷抄等に始まれる事前述の如しと雖も、其の色相莊嚴佛勸請不可の理由に凡そ三義あるが如し。

一、末法は本因下種の時金色佛の利益なし。

二、末法は本末有善の機にして金色佛に結縁なし。

三、末法は久遠元初名字修行を移す故（已上辨或觀心抄石

山應師作應師  
ハ寛師后ノ人

是れ色相莊嚴佛末法無用の主なる原因あるが如し此の故に、一妙導師之れを苛して云く、色相形像末法無益あらば、又曼陀羅も無用なるべし、蓋し形像と、曼陀羅とは、紙木廣略の異なるのみ云々

(則ち七の三十已下)而して又本因口唱の立法を立てんとする引證に、本尊鈔の本門釋尊爲脇士云云、之れ猥りに『爲』の字を曲訓倒解せし者ありと、古來『爲脇士』文に對する當家諸師の説に、凡そ四義あり今試みに其大要を記し以て、彼徒の曲訓ある所以を明かにせん。

## (二)

夫れ宗祖弘安示寂の後は、大部錄内外の諸御書寫傳に、依つて傳えたる明らかなり、故に旁訓等は間々寫誤に依れる事頗る多かるべし、既に吾人が今日の版本に依りて、尙を甲乙一致せざる者あり、從て古來の異説其多くは寫誤に依れるか今の本門釋尊爲脇士の文も亦、異説あるは蓋し此類からん。

一啓蒙自義(十五)爲<sub>ニ</sub>本門敎主釋尊ノ脇士云々謂く之れ釋尊を本尊とするの意かと、夫れ啓蒙師は其意法本尊にあり、而も今『釋尊を本尊とするの意』かとは全く本文の意に従へる者あるべし。

二或師説(啓蒙十八所引)現本無点の一本に對

し、釋尊を以て首題の脇士とする義あり。既に之啓蒙三義を以て斥へるが如く、人法一致の根底を脱せる者あり、佛を以脇士とする義祖文未だ分明からず。

三透師本專義に曰く 本門釋尊爲脇士云云と訓し、上の塔中左右の文と一連と見る事、第二義に類同して共に今の祖意に非ざるべし。

四綱要刪略七本門釋尊爲脇士云云と此說第一義と同致にして、久成世尊を本主とし、四菩薩を脇士とするの意にあり、而も自ら其意の存する所は別なるべし、啓蒙一往は、釋尊を本尊とする意と言ふも、再往は法本尊なる事前述の如し、然るに、人法本別なるべからず二而不二也、故に無作三身の寶號を、南無妙法蓮華經と言ふと、蓋し啓蒙師又此意を存せると雖も、而も導輝二師の如く、明かに人法一致を説かざるが如し、綱要師は人法不二の上に於て、専ら中山二具十一鉢の親刻佛に對し一尊四士を以て、逆縁下種本尊を建立せんとするにあり故に、兩師が意の存する所は自ら

別なりと雖も、而も説明の形式に於ては共に地涌を以て、釋尊の脇士とせんとするにあり。之れ今の祖文の意を得たる者か、諸師多く是れに従ふを以ても、知る可きなり

約逆緣本尊破畧辨及び大崎學報六ノ三頁已下ノ如シ

前述の如く爲脇士の一文に對する誤解ありと雖も、而も未だ釋尊を以て、地涌の脇士とするの倒解あるを見ず、然らば又彼れ此の文を以て、宗祖本佛論の引証とするは、未だ其意を得ざる者あり。

### (三)

要するに此説の起源は、種脱勝劣論にあるか若し、其の論據明白ありと雖も、既に之れ極端に過ぎ、還て軌道を脱せる者也。所論の如くんば靈山會上巍然未散の相何に依てか顯さん、佛を貶して脱益佛末法無用とは、曲も亦甚たし、之れ所謂押高就下推尊入卑の類なるべし。

余且て聞く、古來當家に於ても亦宗祖本佛の義無きに非ず、即ち本家は佛地邊の菩薩なるを以て曼陀羅中にも四菩薩は、特に上版佛略の列にあり而も内証妙覺に二佛無し、故に一位を下して、佛

地邊の菩薩とする也と、又五大説に約してもと佛四菩薩とは一跡也。更らに一派の云ふが如く本因妙（上行）本果妙（釋尊）に約して説くも亦一体也。故に一往其義無きにあらざるも、而も立宗の上に約すれば、能弘の導師と、所弘の正師を混同するを以て、必ず釋尊と四菩薩とは別あるべしと之れ宗祖本佛末法正境本尊と爲すべからざる所以なり。

此の故に導智輝諸師の評破あり、而して今々其の破相を擧ぐるに暇あらず、且く智師に見るに許不許の二義あり、之れ又本尊法体論九十已下詳論する所なれば之を略す、輝師本尊廣辨二十一已下七ヶ條を以て之れを苛し給へるも、諸賢の悉知する所なれば茲に言はず。

前來は之れ予が、冊略等に於て見聞せし概略に過ぎず、されど此の思想は近時に至り、田中居士が一派の主張せる事、既に妙宗紙上、及び過般長瀧氏講演の大要にても知らるが如く、從て又宗學上吾人の研究に値ひす可き事あらんか、更らに後

日の研讀を待たん。

——大正丁巳正月十日記す。——

## 教機時國抄大綱

(承前)

本論

泉 義 敬

### (二) 本鈔の結構

本鈔は始めに教機時國教法流布の前后等の五義を知らしめ、而して此れを知る者を、日本國の國師とも成る可きと云ふ、蓋し法華經は三說超過諸經中王最爲第一ある事を知るを以の故なり。而して此等に迷へる光宅法雲道場惠觀等を擧て、天台大師と對し、他經の法華經に勝ると云ふ者は『舌爛口中』又は『可墮阿鼻地獄』等と云ふ。此れに反して、此の五義を辨へ能く法華經と餘經等の相異を辨ずる者を、弘教の正師とすと仰せらる、又本鈔は釋尊御一代所説の教法を權實に分て、權を捨て、實を説くべしと教へ、若し此れに不從時は

即ち、法華經には『一向説小乘不説法華經佛可墮輕貪』云云と説き、又涅槃經には『一向用小乘經云佛無常也人舌可爛口中』云云と説く事を明し又所被の機を擧て弘教者必ず機を知るべしと、而して謗法の者には一向に法華經を説くべし、然らば毒鼓の縁とあらんと、而して智者には、先づ小乘より權大乘を教へ、後に實大乘を教へ、愚者には先づ實大乘を教ふべし。

然れば、此處に信謗両機下種益を得る事を教ふ次に感應道交の時節を明すに、弘教上時に應ずるの教を説くべしと、即今末法は正しく法華弘通の時節なる事を明す。次ぎに佛教は必ず國に依りて弘まるべきを示して、國に小乘國大乘國等種々有る中、今日本國は一向大乘國あるを明す、次ぎに教法流布の前后を明して、即其國に於て先に弘まりたる教を知て後の教を弘むべし、所謂先きに小乘權大乘弘まりなば後に必ず實大乘を弘むべしと例せば、捨瓦礫可取金珠毫も捨金取不可取瓦礫と教へ給ふ、即ち迷謬五綱の邪師と共に日本國の衆